

ソロモンの偽装 前篇・知見

飯 郷 友 康

昭和四年（一九二九）刊行、大日本雄辯會講談社（現、講談社）『修養全集』全二十卷、第四卷『寓話道話お伽噺』の「お伽噺篇」より、『ふしぎな麦束』と題した話を紹介する。原文の旧字体旧仮名遣いを新字体新仮名遣いに改めた。

むかしあるところに二人の兄弟がありました。兄はおかみさんをもって、大勢の子どもがありました。弟はたったひとりでした。この兄弟はつい近くにめいめいの家をもって、お父さまからゆずられた、同じひろさの畑をたがやしていました。

ある年のことです。もう畑の麦が黄いろくみのりましたので、あちこちにとりいれがはじまりました。二人の兄弟はめいめいの畑に出て麦を蒔りました。ユダヤではかりあげた麦を打つまで、畑にのみあげておこならわしで、方々の畑には、麦の束の山ができていました。

ある晩弟はひとり家にかえってねようとしましたが、ね床にはいつてふとかんがえました。

『兄さんはあんなに大ぜいの子供をもっている。私はたったひとりである。それなのに二人が同じひろさの畑を耕すというのはおかしいものだ。畑はお父さまが分けて下さったのだからどうすることも出来ないにしても私が兄さんと同じだけの麦をとるという法はない。よしよし、夜の中にこっそり畑へでいて、私の麦を、兄さ

んの方へそつともって行っておいてやろう。そうすれば兄さんは気がつくまい』

弟はそう考えましたので、すぐにね床からとびおき、畑へ行って、自分の麦を半分ばかりにへらし、あとを兄さんの畑へもって行って、兄さんの麦束と一しよにしておきました。

やはりその晩です。兄さんはおかみさんにいいました。

『私たちはこんなに多ぜいでたのしくくらししているのに弟はたった一人きりでさびしくくらししているのは可哀そうだ。私たちは子供もあるし、慰めも多いから、すこしくらい貧乏だつてかまわないが、弟はだれもなぐさめてくれる人もなし、話相手もないのだから、金でもなくては気の毒だ。私たちの麦束をわけて、弟のところへこっそりもって行つておこうじゃないか』

おかみさんもそれをきいて、『ほんとうにそれがいいでしょう』と賛成しましたので、兄はさっそく畑へでてゆき、自分の畑に一つである麦をわけて、弟の麦束と一しよにしておきました。

あくる朝二人は何くわぬ顔で、畑へでてきました。そしてめいめい自分の麦束を見ますと、大へんへつっている筈なのが少しもへらずに前と同じことですから、狐につままれたようにふしぎにおもいました。

その次の晩も二人はこっそり麦束をはこびました。あくる朝に

なってみるとやっぱり少しもふえてもへつてもいません。その次の朝も、その次の朝も同じことです。あまりふしぎなので、兄は、

『これは何かふしぎなわけがあるにちがいない。よしよし、こっそり見とどけてやろう』

とその晩は、弟の麦束のかげにかくれて、何ものがくるかとまっています。すると、しばらくたって、畑のなかにだれかがやって来て、弟の麦束をかつぎ、せつせと自分の畑の方へはこんでゆきます。さてさてふしぎな奴だ、何ものだろうとそつとあとをつけて行つて見ると、それはだれでもない、自分の弟でした。

『おいおいお前は弟じゃないか』という、弟はびっくりして、

『だれです、兄さんですか』

『うむ、私だ。お前だったね、毎晩私のところへ麦をはこんでくれるのは』

『ええ、見付かってしまつては仕方がないから白状します。だが、私の麦束がどうしてもへらなかつたのは……ああ、兄さん、あなたも』

『うむ、実は私もお前のところへはこんでいたのだ』

『なぜ、そんな事をなさるんです』

『だつてお前は独り者でなくさめる人もなし、食物でも沢山なければさきのどくだと思つたから』

『そんな事があるもんですか、兄さんこそ大勢の子どもはいるし、たくさん食物がなくては困りでしょう』

とたがい麦束のおしつけくらははじめました。

この事がソロモン王のお耳に入りました。ソロモン王はこの頃、神様のお宮をたてるについて、どこがよかろうかと場所をさがしておいでになりましたが、この事をおききになると、

『そのめでたい麦畑こそ神様のお宮をたてるべきところだ』

と仰せになり、二人の兄弟をよびだして、あつくその心がけをおほめになり、二人の麦畑をお買上げになつて二人には別にひろい畑を下され、この麦畑に大きな美しい御宮をおたてになりました。世界になだかいエルサレムの宮とは、この宮のことです。

執筆者は、蘆谷蘆村（重常、一八八六一—一九四六）¹⁾ 同作の初出は、大正一三年（一九二四）警醒社『基督教童話寶玉集』。今日ユダヤ、キリスト、イスラム三宗教の聖地として名高いエルサレムの神殿建立縁起に絡めた人情話で、道徳教材として、また一種の滑稽劇としても、中々上出来の部類に入る。ただ、旧約聖書の登場人物ソロモンは信心篤く知恵に満ち栄華を極めた王として知られるが、この話そのものは聖書に見当たらない。とすれば、蘆村自身これを創作したか、あるいは先行作品を翻案したか。一九二四年までに蘆村の入手し得た資料を搜索しよう。

碩学ルイス・ギンズバーグ（一八七三—一九五三）の名著『ユダヤ説話集』全七卷（一九〇九年初版）は旧約聖書説話の梗概集大成であるが、このうちに蘆村の『ふしぎな麦束』と似た話を見る。

ソロモンの偉業は第一に、壮麗な神殿を建立したことだが、さて何処に建てたものか、ながいこと迷つていた。ある晩、天の声に導かれてシオンの山に行くと、そこは兄弟二人が分けもつ畑だった。兄弟のうち一方は独り身で貧乏、もう一方は裕福で子たくさん。今は刈り入れどき。こちらは貧しいがこちらは大家族で何かと物入りだろう、と考へた貧乏なほうは、闇夜にまぎれて、せつせとあちらの麦束を足していた。こちらは所帯持ちだがあちらには食ひ扶持がない、と考へた裕福なほうは、やはり密かに、貧乏なほうの麦束を足していた。この畑こそは麗しき兄弟愛の発露、宮を建てるにふさわしいとソロモンは決めて、ここを買上げた。

ギンズバーク（以下、ギ・と略す）の註によると、出典は「コスタ」ミクウェ・イスラエル』五九、おそらくアウエルバッハ『村物語』に引用された説話に基づく。これらに『ハツェフィラ』一八九七年、一七二号の記者が取材したか不明。おそらくアウエルバッハ当時のドイツと只今ロシアのユダヤ人に同様の説話が伝えられていたか。この説話は『詩篇』一三三・一の講釈に基づくものと見られる⁽³⁾。という。この甚だ簡素な説明は検証を要する。まずは出典の一々を再確認したい。

ギ・註は「この説話」を旧約聖書『詩篇』一三三・一の講釈に基づくと推理するが、その根拠を説明しない。確認のために、ここで詩一三三篇、全三節の明治元訳（一八八七）を参照する。

ダビデがよめる京まうでの歌

視よはらから相睦^{あひらみ}とともにをるはいかに善^よいかに樂^ゆきかな 首^{かぶ}に
そ、がれたる貴^{たか}きあぶら鬚^{ひげ}にながれアロンの鬚^{ひげ}にながれその衣^えのす
そにまで流^{なが}れたるがごとく またヘルモンの露^{つゆ}くだりてシオ
ンの山^{やま}にながる、がごとしそはエホバかしこに福祉^{さいは}をくだし窮^ななき
生命^{いのち}をさへあたへたまへり

確かに「はらから相睦^{あひらみ}とともにをる」さまを祝い「シオンの山」（エルサレム神殿の美称）を寿ぐ詩であるので、説話の情景に通じはするが、そもそも「この説話」とは、どの説話か。

一八五一年リヴォルノ（イタリア）刊、イスラエル・コスタ（一八一九—一八九七）著、ユダヤ教童話集『イスラエルの希望』、第五九話より。

栄光ある聖き宮の建てられた所は、むかし、二人の兄弟が継いだ畑だった。一人には妻と子供たちがおり、一人には妻も子もない。二人仲良く一軒の家に住み、父親から継いだ分け前を喜んで、顔に汗して畑を耕した。

さて刈り入れどき、畑の中に麦束を結んで麦打ちをした。二人の

集めた麦の嵩はちょうど同じで、それを畑に積んでおいた。

その晩、兄弟のうち妻も子もないほうは寢床の中で考えた。「こっちは独り者だから、格別なくてならぬ糧はない。あっちには妻も子供もいるじゃないか、どうして分け前が同じなんだ」。それで夜中に起き出すと、盗人歩きで、こちらの麦束をあちらの麦束に持ちこんだ。

ところが、あちらも「畑の麦の分け前が半々、ちょうど同じというのはよくないぞ。こっちは神様に妻子を授かったぶん得をしている。あっちは独り身だから畑の稼ぎくらいしか喜びも楽しみもない。おい妻よ、ひとつ手伝ってくれ。あいつの分け前をこっそり足してやろう」と言うわけで、そうしてやった。

あくる朝、麦束を見ると元どおり同じままなので二人は驚いたが、何も言わず、その晩も、二日目の晩も、三日目の晩も、四日目の晩も、同じことを繰り返した。毎朝毎朝、麦束の嵩は同じ。この不思議を解き明かすぞ、と決めた晩、お互い麦束を手にした相手に出くわした。事情を察した兄弟は、抱き合って口づけし合い、こんなに正直者の良い兄弟を授けてくださった神様に感謝した。この二人の兄弟が善い思いと善い行いを遂げた場を、神様はお喜びになった。世の人々も寿いだ。それで、ここにイスラエル人は神様の宮を建てた。

この話（以下、コ・と略す）の出所を、コスタ自身は明記しない。実際、中世以前のユダヤ古典文献に先例は見当たらない。

さて、ギ・註は単純な錯誤を犯した。コ・と類似する説話は、ドイツのユダヤ人作家ベルトルト・アウエルバッハ（一八一二—一八八二）の小説『黒森村物語』（一八四三）に引用されない。が、ヘブライ語新聞『画期』^{ツァイト}一七二号（一八九七年八月一日ベルリン発行）は、同作家の

随筆「母の説話」に取材した記事を掲載する。記者、筆名「靈感者 A・K」は、バーデン大公（フリードリヒ一世、一八五六—一九〇七）銀婚祝賀記念文集（一八八一年限定出版）を偶然入手し、これに収められたアウエルバッハ晩年の随筆を一般ユダヤ人読者に紹介するため全文を抜粋した。この随筆本文にこそ「コ」の類話（以下、ア・と略す）は引用されるのである。随筆によると、作家の母エーデル（一八五二歿）は少女時代に故郷ノルトシュテッテン（現ホルプ・アム・ネッカー）で懐いた「ユダ尊師様」を終生敬愛して止まず、ベルトルトを含む六女五男の子供たちが殴り合いの大喧嘩をするたびに、いつも決まってこう説教をしたという。

ユダ尊師様に聞いた話をしてあげる。エルサレムのお宮が建った礎は、兄弟愛なのよ。ソロモン王はイスラエルの神様の宮を建てようとしたが、どこを選べば神様に褒めてもらえるか分からなくて、夜も眠れませんでした。すると突然、声が聞こえます。ソロモンよ、立ってシオンの山に行け。ここを神様は住まいに選ぶぞ。この山の上で、兄弟二人が畑を耕していた。一人は裕福で子たくさん、一人は貧乏で独りぼっち。今日は刈り入れた麦を束ねて畑に積んである。ところが、貧乏なほうは畑の端に立って考える。あいつは本当に裕福だが子たくさんだ、俺の麦束を分けてやろう。裕福なほうも畑の端に立って考える。俺は本当に子たくさんだが、あいつは貧乏で可哀想だ、ちよつと麦束を分けてやろう。

さあソロモン、二人の仕業を見に行くがいい。

王は寢床から起きてシオンの山に行きますと、こつちで裕福なほうがあつちで貧乏なほうが、麦束を担いで畑の境に積んでいます。後日、王は兄弟の畑を高いお金で買い上げて、そこに神様のお宮を建てました。

この話を、よく憶えておきなさい。お宮の建った礎は、兄弟愛なのよ。

ここでギ・説は弱点の連鎖を露呈する。まず、註には説話の出典に「コ」を挙げながら、ギ・の梗概は事実上ア・に基づく。確かに両者は類似するが、ア・では主役を演じるソロモン王が「コ」では登場しない。また、ギ・註によれば、「この説話」の起源はロシア東欧ユダヤ民間口頭伝承と推定される。ア・の出処としては適当であろうが、ギ・の論調は明らかに原話の発祥地をロシア東欧に求めているので、少々苦しい。その根拠は、あくまで文献史上たまたまイタリアの「コ」よりもドイツのア・が先に記録されたからにすぎないからである。

なお、ア・以前すでに同様の説話を記載した重要文献を一つ、ギ・は看過していた。フランスのロマン派詩人アルフォンス・ド・ラマルチエヌ（一七九〇—一八六九）の中東旅行記『東方紀行』（一八三五、英訳『聖地巡礼』一八四八）である（以下、ラ・と略す）。一八三三年一〇月二九日、詩人はエルサレム郊外に沈む夕日を眺めつつ「アラブ人の作り話か言い伝えか、最も愉快な東方説話の一つで、ソロモンが御宮の地所を選んだ次第」を思い出す。敢えて英訳を参照する。

昔エルサレムは畑で、今エルサレムにお宮の建つ土地の主は、二人の兄弟だった。兄は結婚して子たくさん、弟は独り身で、母親から譲られた畑と一緒に耕していた。刈り入れどきに、兄弟は同じ嵩の麦を束ねて、畑に積み上げた。その晩、弟に妙案が浮かんだ。「兄貴は妻と子どもを養っているのに、取り分が同じという法はない。こつちの麦を、こつそり足してやろう。そうすれば気がつくまいから、拒むまい」。この案を、さつそく弟は実行した。やはりその晩、兄は起きて妻に言った。「弟は若くて独り身だ、仕事の疲れを慰めてくれる連れ合いもないのに、畑の麦の取り分が同じという法は

ない。こっちの麦束を、こっそり持って行っておいでやるうよ。そうすれば分らないから、拒むまい」。そして、そのとおりにした。明くる朝、二人が畑に出て見ると、驚いたことに麦束の嵩は同じままだった。不思議なこともあるものだ。幾晩も同じことを繰り返して、相手の麦束を足しても足しても嵩は同じままなので、今晚こそは真相を突きとめてやるぞと構えたところが、出くわした相手は兄弟で、お互い麦束を抱えていた。

この二人の麗しき思いと健気な行いが一度に実現した地こそ神に相応しき場であろうと人々は寿いで、お宮を建てる所に選んだのだ。そして、「何と魅力ある伝承であろうか。ここには昔気質の気取らない人情の美德が息づいている。単純、素朴、自然な発想により神に幾つも聞かせてくれた。聖書の気風は東方全土に染み渡る」と感慨に耽るのである。この日記を信するならば、中東パレスチナのアラブ人に、ロシア東欧のユダヤ人と同様の説話が、民間口頭伝承として深く広く根付いていた。少なくとも文献上の記録としてラ・はア・に六五年ほど先行する。また、その話型は明らかにア・よりもコ・に近い。

ラ・とコ・の相違に着目しよう。まず兄弟二人の長幼について、コ・は明言しないが、ラ・は独り身のほうを弟、所帯持ちを兄とする。また二人の共有する畑は、コ・によれば父親の遺産、ラ・によれば母親の遺産。この畑を、コ・は「栄光ある聖き宮の建てられた所」と言い、ラ・は「今エルサレムにお宮の建つ土地」と言う。ここに宮を建てるのは、コ・によれば「イスラエル人」だが、ラ・によれば不特定多数の「人々」である。「ソロモンが御宮の地所を選んだ次第」とは、説話を『東方紀行』著者に伝えた「アラブ人」自身の言であったか、それともこれを「アラブ人」に聞いた『東方紀行』著者の説であるのか、今となつては分から

ない。が、フランス詩人による再話の精度を信ずるかぎり、話の舞台を「今エルサレムにお宮の建つ土地」と屈託なく説き起こせるのは、イスラム教徒であろう（西暦紀元六三八年エルサレム征服、六九〇年「岩のドーム」建立、七一〇年「アルアクサ堂」建立、現在に至る）。当地にソロモン王の建立した神殿は既になく（紀元前五八七年バビロニア帝国侵攻時に崩壊、紀元前五一年再建、紀元七〇年ローマ帝国軍攻撃により崩壊、現在に至る）、ユダヤ教徒にとってエルサレムは過去の栄光を偲ぶ場ではないからだ。なお、土地を母親の遺産として相続する習慣もユダヤ人には異例だがアラブ人社会では通例であるという。ラ・以前に遡る記録例は未だ発見されていない。ゆえに、ハンガリーの説話学者アレクサンダー・シャイバー（一九一三—一九八五）は論文「エルサレム聖堂建立説話」（一九五三）²¹に、ギ・の説の修正を提案した。すなわち、元来この説話は中東アラブ人の創作で、いつしかユダヤ人に受容され、細部の改変を経て、東欧に普及したものではないかという。このシャイバー説が今日の主流である。

これらの事実を踏まえたうえで、ようやく蘆村の作品に一定の評価を下すことができる。大正時代の日本で、キリスト教に傾倒した童話研究者ならば、それなりに素養もあり、情報に恵まれてもいただろう。もしかすると旧約聖書の古典へブライ語を少々嗜んだことはあるかもしれないし、十五年前に刊行されたギ・の存在を知り参照したとしても不思議はない。が、既に見た通り、少なくとも「この説話」に関してギ・註は甚だ簡素なうえに不正確で、これに基づきコ・ア・に接近することは極めて難しい。接近し得たとしても、両者を素材に用いることは更に難しからう。コ・は、ユダヤ文学史上初の童話集として知られるが、近世へブライ語作品で、翻訳はない。ア・は元来ドイツ語作品だが初出は皇室企画の稀観本で、これ以外にはギ・の紹介する新聞記事に掲載された現

代へブライ語訳しかない。その当時、もしも、ギ・註に拠りつつ彼の不備を認め（あるいは、ギ・註に拠らず独力で）コ・ア・を知りながら敢えて別にラ・を採ることのできた人が『ふしぎな麦束』の作者であるとすれば（並外れた学力と資産と社交がなくてはならず）、日本近代文学史における蘆屋蘆村の知名度は余りにも低すぎる。

私見によれば、蘆村はラ・すなわち『東方紀行』挿話を英訳『聖地巡礼』に基づいて翻案した。仏語原著は（コ・ア・同様、またギ・も）二人兄弟の長幼を区別しない。独り身を弟、所帯持ちを兄と明言するのは『東方紀行』英訳版『聖地巡礼』である。

が、『東方紀行』も『聖地巡礼』も兄弟の畑を母親の遺産とするのは同じであるのに、『ふしぎな麦束』は敢えて「お父さまからゆずられた土地」とするので、むしろコ・と一致する（ア・ギ・は土地の由緒に言及しない）。

兄弟が「麦束の押しつけくら」をするくだけは落語や講談に通じる面白みがあり（ラ・コ・ア・ギ・にはない）、おそらく蘆村自身の手入れであろう。話のオチとしては、庶民の義理人情ゆえに生じた滑稽な諍いを名君が見事に仲裁、一件落着するわけで、いわゆる大岡政談の「三方一兩損」を連想したくもなる。もちろん、事件に関わることでソロモン王は日頃の悩みを解消できたのだから、しなくてもいい損をした大岡越前とは違い、むしろ大いに得をした。この相違は、ギ・（ないしア・）を経由せずには発生し難い。ラ・にもコ・にもソロモン本人は登場しないからである。

以上、作品の全体と細部の表現のみに即して言うならば、蘆屋蘆村『ふしぎな麦束』は、アルフォンス・ド・ラマルチヌ『東方紀行』に伝わるアラブ民話と、イスラエル・コスタ『イスラエルの希望』に収まるユダヤ童話と、ルイス・ギンズバーグ『ユダヤ説話集』梗概によるソロモ

ン伝説の折衷型、ただし蘆村本人による実際の取材範囲は残念ながら今のところ不明とせざるを得ず、これについては是非とも日本近代文学史に詳しい方々の御意見を伺いたい。

ユダヤ説話研究上の問題を、とりあえず二つばかり提起しよう。まず、説話は語り手と伝え手の思惑を如実に反映する。この場合、エルサレム神殿建立説話を、語り手も伝え手も皆「我が事」「我が物」にしたいのである。

例、ラマルチヌ。「アラブ人の作り話か言い伝え」をイスラム教徒に聞かされながら、端的にアラブ人イスラム教徒の美德を示す話としては楽しめず、「聖書の気風は東方全土に染み渡る」などと感動するのは、いかにもキリスト教の普遍性に疑問を抱きながら信仰を捨てきれず東洋趣味に耽る近代フランスのロマン派詩人らしい態度ではないか。

例、ギンズバーグ。碩学らしからぬ資料の混同と看過を犯した背後には、起源の不明な説話を是が非でもユダヤ人の古伝承であったことにしたいという願望がなかったか。

例、蘆村。実際の取材過程は不明だが、少なくとも結果としては、大筋でラマルチヌを踏襲しながら、細部と結末をわざわざユダヤ色に塗り替えることで「基督教童話」を仕立て上げる。たしかにソロモンは旧約聖書の登場人物だが、アラビア文学でもスレイマンとして親しまれているのだから、ラマルチヌに倣い素直に「アラブ人の作り話か言い伝え」として紹介できないものだろうか（明治時代以降、日本人キリスト教徒には内村鑑三を始め何故かユダヤ教に過剰な憧憬を抱く反面どこかしらイスラム教を蔑視する傾向が見られるのである）。

なお、古典学者研究対象とする作品の原典を崇敬するあまり、これに基づく後世の説話を亜流か二流として軽視しがちである。が、こうした説話は作品受容史の実態を示すのみならず、原作の孕む問題を的確に

突いていることが多い。実際のこの『ふしぎな麦束』に収斂するエルサレム神殿建立説話の数々は旧約聖書の描く賢王ソロモン像を立体的に捉えるうえで有益な視点を提供するのだが、今は既に紙数の制限を尽くした。後篇に続く。

pest: Akadémiai Kiadó, 1985, pp. 19-28.

(いづ)つともやす 立教大学兼任講師)

注

- (1) 『日本児童文学大事典』(大阪国際児童文学館、一九九三年)より「菅屋重常」の項を引用する。
…… 童話作家、童話研究者。号芦村。島根県松江市生まれ。自身、口演童話はやらなかったが、それへの理解の深さから口演童話ともされる。…… 一九〇三年「新声」「文庫」などの雑誌に詩をはじめて投稿。〇四年、キリスト教の伝道者となるために聖書学院に入学するが、「自己の使命茲に在らざるを覚つて」中退した。〇八年、「新少年」の主筆となり、はじめて童話を執筆した。一三年、『教育的応用を主としたる童話の研究』(勸業書院)を刊行。巖谷小波、樋口勘治郎の序文を得た本書を「童話に関する研究所の嚆矢」と自ら認めた。……
- (2) Louis Ginzberg, *The Legends of the Jews*, vol. 4, p. 154.
- (3) Ginzberg, *ibid.*, vol. 6, p. 254, n. 57.
- (4) 全号インターネット上で閲覧可能。
<http://jmul.huji.ac.il/dl/newspapers/hazefrah/html/hazefrah.htm>
- (5) A. de Lamartine, *Voyage en Orient*.
- (6) Alphonse de Lamartine, *A Pilgrimage to the Holy Land*, 2 vols., New York: Appleton & Company, 1848, vol. 1, pp. 283-284.
- (7) Alexander Scheiber, "agadah 'al meqom bet-hamidqash birusha-layim," in *Essays on Jewish Folklore and Comparative Literature*, Buda-